

古文 品詞分解（動詞・助動詞）「伊勢物語」 束下り 略解

①行き行きて、駿河の国に②至りアぬ。宇津の山に③至りて、わが④入ライむと⑤する道はいと暗う細きに、薦・楓は⑥茂り、もの心細く、すずろなるめを⑦見ることと⑧思ふに、

修行者⑨会ひウたり。「かかる道は、いかでか⑩いまする。」と⑪言ふを⑫見れば、⑬見エし人オなり

かけり。京に、その人の御もとにとて、文⑭書きて⑮つく。

駿河キなる宇津の山べのうつつにも夢にも人に⑯あはクぬケなりコケリ

富士の山を⑰見れば、五月のつごもりに、雪いと白う⑯降れサリ。

時⑯知らシぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の⑯降るスラム

塩尻のタやうになむ⑯ありチける。
その山は、ここに⑯たとへば、比叡の山を二十ばかり⑯重ね上げたらソムほどして、なりはなほ⑯行き行きて、武藏の国と下総の国との中に、いと大きなる河⑯あり。それをすみだ河と

なほ⑯いふ。その河のほとりに⑯群れみて、⑯思ひやれば、限りなく遠くも⑯来ツにテけるかなと

⑯わびあへるに、渡し守、「はや舟に⑯乗れ。日も⑯暮れナぬ。」と⑯言ふに、⑯乗りて⑯渡らニム

と⑯するに、みな人のわびしくて、京に⑯思ふ人なきヌにしも⑯あらねず。さる折しも、白き鳥

の、嘴と脚と赤き、鳴の大きさノなる、水の上に⑯遊びつつ魚を⑯食ふ。京には⑯見えハぬ鳥

ヒなれば、みな人⑯見知らフ。渡し守に⑯問ひへければ、「これなむ都鳥。」と⑯言ふを⑯聞きて、

名にし⑯負はばいざ⑯こと問はホム都鳥わが⑯思ふ人はありやなしやと

ヒ⑯詠めマリミければ、舟こぞりて⑯泣きムにメケリ。

